マッセ・市民セミナー（NPO法人ちゃいるどネット大阪共催）

「子どもの心により添う
～子どもは自ら育つ力を持っている～」

開催日：平成25年６月１日（土）

会　場：大阪国際交流センター　小ホール

「子どもの心により添う ～子どもは自ら育つ力を持っている～」

柴田　愛子　氏
（りんごの木子どもクラブ　代表）

はじめに

こんにちは、柴田愛子です。関東から来ました。私自身は「りんごの木」という、認可を受けていない幼稚園のようなものを横浜の都筑区で経営しています。横浜というと、みなとみらいなど港の方を思い浮かべられると思いますが、もっと山の方の、昔はそれこそ林だった所を横浜市が大胆に平らにしてまちづくりをした人工的な所です。

1．正しい教育

今日は保育関係者が多いとお聞きしましたが、私は幼稚園の先生をしていました。最初に子どもの仕事をしたいと思った時に、幼稚園は近くにあったのですが、保育園はありませんでした。保育園という存在を知らなかったこともあり、幼稚園の先生になって、正しい保育をして、きちんとした子を育てたいと漠然と燃えていたのです。第１子が生まれた時、みんな漠然と、いいお母さんになっていい子に育てたいと思うでしょう。最初から、生きていればいいかと思う人はめったにいません。やはり最初は肩に力が入ります。私もそうして幼稚園に勤めはじめたのですが、勤めた先が割と学校型で、そのやり方が正しいのかどうか、よく分からなかったのです。幼稚園はどこも同じだと思っていたけれども少し違うのだなと思い、自分の燃えている気持ちをどうしたらいいか分かりませんでした。

１年目、私は数々の失敗をしました。よくクビにならなかったと思うぐらいの先生でした。子どもが家に帰ってしまったり、遠足で１人置いていってしまったり、とんでもないことをしてしまいました。いい時代でクビにはならなかったのですが、体験がないのでどこに神経を張っていいか分からないのです。頑

張ろうと思って少し空回りしている感じだったと、今になって思います。日常的な保育はとても人に自慢できるものではありませんでしたが、頭の中では正しいものを求めていました。

たまたま近くに幼児教育を学ぶ夜間の大学があり、私は毎日通っていました。そのうちに、ひとりの先生がかわいがってくれるようになって、同好会に入ってしまいました。その先生がいろいろな研究会に連れていってくれたのですが、勉強すればするほど、いろいろな考え方があり過ぎて何が正しいか分からなくなったのです。例えば絵を一つ取っても、自由にのびのび心の解放と言うグループもあれば、絵を持ち寄って心理分析するグループもありました。それから、絵は一つの伝達手段だから輪郭を描きましょうと教えるところもあれば、絵を使って自意識を高めるということを教えるところもありました。歌もしかりで、心の解放が大事だからアニメの歌でも何でもいい、音痴でもいいというところもあれば、絶対音感は幼児までというところもあります。それから、リトミック、わらべ歌、どれも出てごらんなさい、ぐちゃぐちゃになってしまいます。何が正しいか分からなくなって、訳の分からない世界からは足を洗おうと思って５年で辞めてしまいました。

今度はOLをしました。最初は面白かったです。保育現場とは違って、何といっても職場がきれいでした。更に職場で働いている人が美しい。私の場合は少し給料が良かったりして、続けていればよかったとも思うのですが、毎日が同じなので飽きるのです。子どもの顔がチラチラしてきてしまい、やはり子どもは面白いなと思って、違う幼稚園に勤め、また研究会にも行きはじめました。

通算すると10年間、幼稚園で子どもと接してきて、それなりに研究会に行ったり、いろいろな先生の話を聞いたり、本を読んだり、データを目にしたりして勉強しました。そして、私の結論としては、どうやら正しいものはないらしいということになったのです。正しいように思えるものはあります。それなりの権威のある先生は説得力があります。なるほどと思うのですが、子どもは１＋１＝２の方程式のように、こうしたから育つというものはないと思ったのです。いろいろな考えがありますが、こうしなければいけない、これでなければというものはないのではないでしょうか。

2．時代によって異なる育て方

時代によって異なるものの一番顕著な例は、赤ちゃんの育て方だと思います。40年ほど前は、赤ちゃんが産まれると、まず産湯に浸からせました。それが、今は赤ちゃんを拭いているのです。産湯という言葉すら死語になってしまいました。時代劇を見ていると、陣痛が起こると「お湯を沸かせ」と言っていますが、今は、あれは一気に体温が下がるから良くないとされています。それから、40年前は母乳よりもミルクの方が栄養のバランスが取れていいとされていました。更に、夏になるとあせもができてかわいそうなので、ベビーパウダーなどの白い粉をパタパタして真っ白にして育てていました。しかし今は、保育現場でもそうでしょうが、汗腺を詰まらせるから良くないとされて、使わないのです。また、かつては、自立心を阻むので添い寝はやめましょうと指導されました。今は添い寝をして安心させてあげましょうと指導されています。更に、かつては泣いて抱くと抱き癖が付く、今は泣いたら抱いてあげましょう、このように正反対に近く変わっていくのです。

最近、祖父母が子育てに参加することが多くなり、先日の新聞でも、祖父母用に今どきの子育てについての記事が連載されていました。そこには虫歯菌が出てきていました。虫歯菌について言われだしたのは約20年前からですが、虫歯は菌でうつるので、孫がおばあさんに「欲しい」と言っても、かじりかけのものをあげてはいけない、また、自分の箸であげてもいけないので違うお箸であげましょうと書いてあるのです。そんなことはできません。研究者によって、どんどん細かいことが明かされていきます。そして、育て方について、ああでは駄目、こうでは駄目ということが多くなってくるのです。

私はかかりつけの歯医者さんに、虫歯菌は本当にいるのか聞きに行きました。確かに菌でうつるのだそうです。しかし、「インフルエンザではあるまいし、この箸で移したからここに虫歯が発生するなどというばかなことにはならない」と言っていました。子どもは、人が食べているものはおいしそうに見えるものです。子どもは人の食べているものを欲しがります。でも、「虫歯菌がうつるから、これは駄目なのよ。虫歯菌が付かないようにこれをあげましょうね」と言えば、もうそれはおいしそうには見えないと思いませんか。その歯医者さんは「そのように厳密に考えてやることはないのではないですか」と言っておられました。私は、心や文化という、科学で解明されたものでは埋められ

ないものがあると思っています。虫歯ができて何が悪い、治せばいいと思ったりするわけです。

時代によってこのように変わるのですが、特に30～40代以降の方は、夏の間、真っ白に粉をはたかれて大きくなったと思います。汗腺が詰まっていますか。私はおかげで汗をかかなくなったのですという話にはならないはずです。研究者は大変狭い範囲で研究しています。そして、そのことは事実かもしれませんが、これでなければ生死に関わるという話ではないと思うのです。しかし、今は情報がたくさん流れてくるので、そうでなければいけないような気がしてしまいます。

一方で、時代の影響をあまり受けておらず、変わっていないのは保育界ではないかと思います。保育界も一斉保育から自由保育になり、また、学級崩壊は幼児教育のせいだと言われた時期もありました。大きな流れはありますが、子育てほど影響を受けていないのではないかと思っています。学校教育ももちろんそうです。ゆとりは失敗だったと言われていますが、それを非難しているのではなくて、どんなに賢い人が頭を寄せ集めて「今の子どもはこうだ、これをきちんとすれば大丈夫」と思っても、大成功にはならないということです。ですから、どれをやってもやはり一長一短で、いろいろなことがあると思います。

また、今現在、国によっても教育の仕方などは随分違っていますが、時間もないので省きます。

３．専門家によって異なる育て方

先ほど言ったように、専門家は大変狭い専門分野の中で話しています。虫歯菌がうつるという新聞記事の近くに、子ども相談が載っていました。私が見た子ども相談の中に「指しゃぶりをしている子がいる。指しゃぶりを取った方がいいでしょうか、どうでしょうか」という質問がありました。それには歯医者さんが答えていました。歯医者さんは歯の専門家なので、指しゃぶりをしていると出っ歯になったり、あごの形が変形してきたりして、とにかくあまり良くないから早く取った方がいいと言います。横浜市なども、１歳半検診で指しゃぶりを取るように言われるそうです。その新聞の歯医者さんは、「２歳ぐらいになったら取ってはどうでしょうか。指の代わりにおしゃぶりにしたらどうでしょうか」というようなことを書いていました。

ところが、歯医者さんがそのように答えると、みんな専門家に弱いので、「あ、これは駄目なのだ」と思って子どもに言い聞かせるのです。ただ、「あのね、これをしゃぶっていると出っ歯になっちゃうんだよ」と言っても、２歳や３歳には出っ歯がイメージできません。一生懸命説得しても、４歳未満はお母さんの言っていることの意味がなかなか分かりません。ただ、お母さんが何だか一生懸命言っていると感じるだけです。保育者もそうですが、子どもに言い聞かせている時、分かったのか、分かっていないのか、分かりません。そうすると、こちらが終わりにできないのです。ですから、大抵の人は最後に「分かった？」と付けるので、子どもは「分かった」と言ってしまうのです。これは理解して自分の行動を変えると言っているわけではなく、「分かった？」と言われるから「分かった」と言っているのです。これが５歳を超えてくると「分かんない」と言うと繰り返されるのがわかるので、「分かった分かった、うん分かった」と言うようになりますが、これも理解して自分の行動を変えると言っているわけではありません。

指しゃぶりを取るために、大抵の人はまずバンドエイドを貼ります。しかし、バンドエイドではめげません。次は、かさばるように包帯を巻きます。包帯でもびしょびしょになって駄目な時は、次にするのがカラシです。今どき、爪かみや指しゃぶりの子どもをなくすために、辛いマニキュアを売っているのです。業者はすごいです。成功率は10％未満じゃないでしょうか。取りあえず一生懸命やって、「これは駄目じゃないの、少しも取れないわ。これ以上やれることがないわ」と半分諦めるでしょう。

少し前の心理学者や精神科は「お母さん、指しゃぶりをしているのは愛情不足なのです。もっとかわいがってあげなさい」と言うことが多かったのです。ちなみに、今、一番多いのはストレスです。愛情不足と言われると、ほとんどのお母さんは心当たりがあるのです。「私のせいで指しゃぶりしていたの。ごめんね、ごめんね、かわいい、かわいい」とベタベタします。でも、もつのは２～３日です。だんだん嫌になってきてしまって、こんなにベタベタしているのに、一体いつになったら直るのかと腹が立ってきます。ところが今どきの心理学者は「これがあると安心できるのだから、無理に取ることはないでしょう」と言うのです。このように、同じ子どもの現象も、専門分野によって診断が違ってしまうのです。

保育もそうだと思います。絵の指導、歌の指導もそれなりに一理あるかもしれませんが、それが真実かどうかは分からない。自分にできるかどうかが問題なのです。例えば歯医者さんにそう言われて、うちの子どもにはまだ無理だと思ったらパスしていきましょう。愛情不足と言われて、そうなのかもしれないと少し考えることは必要ですが、これは私にはできない、私には無理だと思ったらパスするのです。保育にも「私らしい保育」があっていいと思います。正しい保育を求めるのではなく、「私らしい保育」を求めることです。

４．情報の物差し、発達理論の物差しからの脱皮

今はデータが一目瞭然で、パソコンを使えばいろいろなデータが出てきます。そうすると、私たちは保育の勉強をしていることもあって、何歳は何ができるはずと思うようになります。子どもそのものを見ないで、情報の物差し、発達理論の物差しで子どもを測ると、遅い、早い、普通という仕分けしかないのです。

10年間、自分なりに勉強してきましたが、どうやら正しいものはないらしいという結論に至って、ふと気が付きました。私は子どもが健やかに育ってほしいという願いを持って、子どもの仕事に就きたいと思いました。なぜか高校生ぐらいの時から、「子どもは生まれた以上、生まれてきて良かったと思える人生をたどってほしい」という願いが私の中にあったのです。そのために私がやってきたことは、正しいことをするということでしたが、正しいことはありませんでした。考えてみると、どれも大人の言い分にばかり耳を貸してきたのです。今の社会がどういう子を望んでいるのか、先生がどういう子を「いい子」と評価するのか、今の情報は何歳に何ができるようになってほしがっているのか、それから、親はどういう子を望んでいるのか。どれもその子自身というよりも、その子を取り巻く大人たちの願いばかりだと思ったのです。

ここで私は原点に戻ろうと考えました。原点とは、子どもは感じていないのか、考えていないのか、子ども自身に育とうとする力はないのか、大人がどう育てたいかではなく、子どもはどう育とうとしているのか。このように視点を完全に子どもに移してみようと思ったのです。子どもを主人公にしてみる、それも子ども全般ではなく、何歳の子どもではなく、男の子、女の子ではなく、私の前にいる一人ひとりについて興味を持つということです。

5．子どもの心に寄り添う

一人ひとりの子どもを分かりたいと思った私は、取りあえず、その子の心に寄り添ってみようとしました。心に添うことは難しいことではありません。子どもを見て、あくまでも推定でしかないのですが、恐らくこの子はこう感じているのではないかと思うことを言葉にしてみるようにしました。例えば、水でいたずらをしている子がいるとします。その顔はキラキラしています。水で遊んでいいか悪いかはさておいて、こちらも「きゃーっ」と言って、「面白いね」と言ってあげるのです。

「危ない危ない、そんなことをしたら転んじゃう」と言うと、大抵転んでしまいます。そうすると、ほとんどの親は「だから言ったでしょう。ママの言うことを聞かないからよ。さっさと立ちなさい」と言います。しかし、子どもは「言われたとおりになっちゃった。ママの言うことを聞いておけばよかった。さっさと立たなければ」などとは誰も思っていません。「痛い」としか思っていないでしょう。だから、走っていって「痛いね、痛かったね」と言ってあげることが、心に添うということなのです。どうして転んでしまったかということではなくて、子どもが感じていることを言葉にするのです。

子どもは血を見ると、倍痛がります。関東の子どもは血のことを「血が」と言います。「血が出て痛い」「血が出てしまった」というように、血はいつも「が」とくっついているので「血がが、血がが」と言うのです。子どもは痛がっているのですが、お母さんはだっこすると自分に血がくっついてしまうので、泣いているのに「痛くない、痛くない。我慢だよ。おうちに帰って絆創膏」と言うのです。血が出て痛いのだから、私は「痛かったね」と言います。痛い時に「痛かったね」、面白い時に「面白いね」と言うのは、訳を分かってあげるわけでも、理解してあげるわけでもありません。とにかくその子の表情から読み取って、恐らくこう思っているのではないかということを言ってみたのです。

泣き虫な子は、ずっと泣き虫です。私も１年生ぐらいまで、すごく泣き虫でした。子どもが泣くと、保育者として放っておくわけにいかないので行かざるを得ません。ほとんどの大人は近づいていって、泣いている子に「どうしたの」と聞きます。「どうしたの」が言える子は泣きません。言えないから泣いているのです。言葉を持つ前の赤ちゃんの時から、生まれ持った、一番ストレートに表現できる方法が、泣くことです。子どもは、泣くことはお手の物で、言葉

よりも自由自在に表現することができます。

ところが、なぜ泣いているのかを知りたいのが大人です。ですから、泣いている子のところに行って、「どうしたの？　泣いていたら分からないでしょう」「あのね、あのね」「あのねばかりじゃ分かりません。ちゃんとお口で言ってごらん。何のためにお口があるの。泣きやんだら後で聞いてあげましょう」などと言うのです。子どもが泣いたから気になって、子どもに寄り添ってあげようと思って来たにもかかわらず、「泣いていても訳が分からないので、私に分かる言葉という形に変えなさい」と言っているわけです。これでは子どもに寄り添っているのではなく、子どもを寄り添わせています。

子どもにとって、感じていることを頭で整理して口に出すことはなかなか難しいです。それが言える子は泣かずに「あの子が僕のおもちゃを取って」と言いに来ます。

泣いている子を見てみると、「怒って泣いている時」と「悲しくて泣いている時」、「甘えて泣いている時」、それから「体調が悪くて泣いている時」もあります。担任していたり、同じ園だったりすると大体分かります。近づいていって、怒って泣いていたら「怒っているのだよね」と言ってあげる。心に寄り添うというのは、ただそれだけのことなのです

6．りんごの木でのエピソード

りんごの木には、午後になると小学生の活動もしています。子育て講座や教育者向けの講座も開いています。私は、とにかく子どもの足しになることは何でもやる、子どもの足しにならないことはやらないという至ってシンプルな生き方をしているのですが、そこにソウタツとコナツという４歳の双子が入ってきました。

ある時、ソウタツが駅に向かって走る姿が見えました。「え、帰る気？」と思って追い掛けていこうとしたら、担任と、ソウタツと同じクラスの子がどどどっとやって来ました。ソウタツは歩道橋のような所でひっくり返って泣いています。そこには円陣ができていて、クラスの子と担任が一生懸命言い聞かせているのです。私もやっと追い付いて、みんなを帰らせました。ソウタツはひっくり返って泣いているのですから、怒っているのです。「怒っているんだよね。頭にきているのだよね」と言うと、泣きながら「そうだよ！」と言いました。

この人は分かってくれたと思ったのでしょう。その寄り添った一言はソウタツの心情を察しているので、ちょっと起き上がって「そうだよ、マユミが！」と言うのです。マユミというのは保育者の名前です。「そうか、嫌なやつだな」と私も共感します。「マユミがね、僕のことをママからもぎとったんだよ」「そうか、ママからもぎとったのか。そりゃあ嫌なやつだな」。すると、「そうだよ、僕はママにお話があったのに」と言うので、「お話があったのか。じゃあ、りんごの木に帰って電話する？」と言うと、「あ、うん」と言って立ち上がり、帰ることになりました。

その場には、コナツという双子のもう一方がいました。双子は胎児の時から一緒なので、片方に何かがあった時に、もう片方は立ち去れないのです。コナツは警戒心が強い子で、それまで私と手をつないだことはありませんでした。そのコナツが私のところへ来て、私の手を握ってくれたのです。「ソウタツがこんなことになってしまいました。よろしくお願いします」と言っているのだろうかと思いました。「そうだね、そうだね」と言って、ソウタツと３人で歩いていったのです。途中でコナツが「ソウタツ、どうしたの？」「ママに電話するんだよ」「どうしてママに電話するの？」「お話があるからだよ」「何のお話があるの？」「大事なお話」「大事なお話って何？」とコナツが言うと、りんごの木は目前だったのですが、ソウタツは「もういいや」と言って遊びに行ってしまいました。

しかし、やはりマユミを見る目が冷たいのです。まだ４月だったので、これで関係が悪くなってはまずいと思い、「ソウタツはマユミに怒っているのだよね。何で怒っているか言った方がいいよ」と言うと、ソウタツは「僕のことをママからもぎとった」と言いました。するとマユミは「えっ？　だって、今日のお母さん、いつもと格好が違ったから」と言ったのです。私たちは長くやっていると、お母さんの服装と化粧の具合で、そのまま家に帰るのか、一般の勤めに行くのか、どこか特別な所へ行くのかが分かります。その日は何か特別で、きれいだったのではないのでしょうか。お母さんが今日は少し違っていたので、「急ぎますか」と聞いたら「急ぎます」と言われた。それなのに、ソウタツがいつまでもグズグズしているからもぎとったと言うのです。

私たちでも分かるのですから、子どもはもっと分かるでしょう。恐らく家にいる時から、「お母さんは、今日はいつもよりいいものを着ているな。僕たち

を送ってからどこかに行くんだ」と思っていたのでしょう。しかし、子どもは「お母さん、お出掛けですか」とは聞きません。それがグズグズになるわけです。つまり、マユミはお母さんには耳を貸したけれど、御本尊のソウタツには耳を貸さなかったのです。

確かに子どものつもりを尊重すると一日が進みません。しかし、その時に「ソウタツ、悪い。グズグズしたい気持ちは分かるけれど、今日お母さんは急ぐんだって。帰りに２倍だっこしてもらおうね」と言えば全く違ったと思います。ソウタツは今こんなふうに別れたくないというところに少し心を寄せれば、違ったでしょう。このように、困っている時には「困っちゃったね」、悲しんでいる時には「悲しいね」と言葉に出して言ってみることが、私流の「子どもの心に添う」ということなのです。ちなみにソウタツはマユミに「もうちょっとだっこしていてほしかった」と気持ちを言えました。そしてマユミは「ごめん」とあやまって一件落着となりました。

７．子どもの表現は言葉ではない

小さいお子さんを扱っている方もいらっしゃると思うので、幾つか事例をお話ししたいと思います。まとめて言うと、子どもの表現は言葉ではない、寄り添うことで言葉ではない表現が読み取れるということです。

りんごの木に２歳のあっ君という子がいます。４月の時は、お母さんは仕事を持っていてすぐ帰るので、お母さんから私が抱き取ると「ママ、ママ」と泣いていました。ママの行った方に「あっち、あっち」と言って、だっこしていても落っこちそうになるのです。結構長いので「ママ、あっちに行っちゃったね。ママを探しに行きたい？」と聞くと、「うー、うー、あっち、あっち」と言うので、ママを探しに行きました。

そうしたら、水がチョロチョロ流れていました。２歳前半なので「お水だ、お水があったね、面白いね」と言ってごまかすのですが、思い出すのです。自分が来た方向が分かっているので、「あっち」の方向が変わるのです。これ以上遠くに行きたくないなと思いながら行くと、ぬかるんでいる空き地がありました。雨の翌日だったので「あっ君、ぐじゅぐじゅだね。面白いね」と言っていたら、あっ君もそれは気に入ってくれました。そろそろいいのではないかと思って、「あっ君、リュックを持ってきたでしょう。あっ君のリュック、どん

なのか見たいな」と言うわけです。皆さんもよくやるでしょう。「じゃあ、りんごの木に帰って、あっ君のリュックを見せてくれる？」というと、「うん」と言ってくれました。大人は、特に私は不安になると口数が多くなるので、黙って歩けません。つい言葉で何とかしたくなるのです。

りんごの木に着いて「あっ君のリュックだね。中にお弁当が入っているかな」と言ってお弁当を出しました。まだ10時ぐらいだったのですが、そんなことは言っていられません。まだ最初のお弁当なので、お母さんの力が入っているのです。小さなおにぎりに、海苔で模様が切り貼りされています。それから赤いプチトマトと、ウインナーがタコになっていて、卵焼きが入っていました。「あっ君、おいしそうだね」と見ていたら、あっ君が卵焼きをつかんで私の口に入れてくれたのです。私は涙が出てしまいました。「お世話を掛けています。よろしくお願いします。僕はあなたを信じます」というメッセージの卵焼きです。「あっ君、これ、おいしい」と言うと、あっ君は、自分は食べずにふたをしました。

その時私は、子どもは言葉でなくてもきちんと心を表現していると思いました。そのことがうれしくて、お迎えは違う人だったのですが、とにかく早くお母さんに伝えたいと思い、速達を出しました。お母さんはまだ３～４日しか来ていなかったのですが、「あの速達を頂いた時に、ここに預けてよかったと思いました」と言ってくれたのです。子どもに対する熱い思いは、熱いうちに伝えた方がいいです。客観的に「今日、おたくのお子さんが卵焼きをくれたのですよ」と言っても、既に熱が冷めています。やはり熱いうちに行動した方がいいと思います。子どもは言葉では表現しませんが、態度で表現しているのです。

もう一つの例です。４歳で入ってきた、てっちゃんというお子さんです。てっちゃんは他の幼稚園に行っていたのですが、お母さんによると、幼稚園で暴力を振るうと言われたのだそうです。言葉の暴力もすごかったようです。担任の先生から「てっちゃんの暴力を何とかしてください」と言われたものの、家では暴力を振るわないので、暴力をやめさせてくれと言われてもどうしていいか分からない。私が「家ではそうでないなら、幼稚園に何か理由があるのではないですか」と聞くと、「先生はそんなことはおっしゃらないで、とにかく暴力をやめてほしい、おたくのお子さんのおかげで登園拒否をする子まで出てきてしまって困ると言われるので、幼稚園を辞めてりんごの木に入れたいと思って

来たのです」とおっしゃいました。

りんごの木が合うかどうか分からないので、夏休みだったこともあり、翌日から１週間、とにかく来てもらったのですが、大変な子なのです。欲しいものがあると行く。その子が貸してくれないとキレてしまうのです。私もなぜそうなってしまうのか分かりませんし、どうしていいか分かりません。ただ、てっちゃんのところに走っていって抱きしめて、「思うようにならなくて頭にくるよな。貸してくれないから嫌なんだよな」とか、「もう嫌になっちゃうよな。もうりんごの木なんて来てやるものか」と、彼の思っているであろうことをいろいろ言ってみるのです。他の子は、とんでもない子が急に現れたと思ってびっくりしているので、てっちゃんを抱きながら「ごめん、分かっていないんだ。許してやってくれ」と言うことが１日に３回も４回もありました。

ところが、次の日、次の日とだんだん回数が減っていきました。そして、更にその次の日あたりになると、今度は暴力を振るう前に、「あの子が、あの子が」と私に言いつけに来るようになったのです。「あの子のものを使いたいのね。じゃあ、一緒に言ってみようかね」と言って、「これ、てっちゃんが使いたいらしいんですけど」と言いに行くと、「駄目！」と言われてしまいました。それでも貸してあげなさいとは言いません。「残念だったね、駄目でした」と言っていました。そのうちに、てっちゃんは言いつけにも来なくなりました。１週間経つと普通の子になってしまったのです。

お母さんは「りんごの木だと、うちの子らしく落ち着いているので」とおっしゃるので、「では、幼稚園の方にご報告して、了解を得ますね」と言って幼稚園に電話すると、幼稚園側は大変お喜びになって「結構です。よろしくお願いします」とおっしゃいました。りんごの木に来ることに決めた時に、てっちゃんはお母さんに「僕は幼稚園を辞めて、りんごの木の子になるの？」と聞いたのだそうです。幼稚園が目の前だったのです。お母さんが「うん、そうしようと思う。幼稚園に行くとてっちゃんは乱暴になるから、お母さんはあまり好きじゃない。でも、りんごの木に行くと、家にいるてっちゃんと同じだから、りんごの木に替わってほしいと思っている」と言いました。すると、てっちゃんは「あのね、ああいうふうになっちゃう時は寂しい時なの。りんごの木ではね、そうなっちゃった時は愛子先生がだっこしてくれるんだよ」と言ったのだそうです。いい話でしょう。

子どもは表現が分かりにくいし、言葉できちんと言ってくれません。でも、きっと何らかのサインは出すのです。私はいつも分かるわけではありませんが、分からない時には取りあえずその子の気持ちを代弁してみます。原因を分かって解決してあげようというところまでは至りませんが、その子の代弁をするところから糸口が見つかることが多いのです。

先日、ある保育園の保育者から相談がありました。子どもが靴を隠したそうです。大騒ぎになってみんなで探していると、隠した子が「あったよ」と言ってきた。そうやってうそをついている子をどうしたらいいかという相談でした。私は、それは靴を隠しながら「僕を見つけて」と言っているのではないかと思いました。「靴があった」と言うと、みんなが「○○ちゃんが見つけてくれた」と言ってくれる。「僕にもう少し温かくして。僕にもう少し手を掛けて」と言っているのではないかとお話ししました。

子どものサインは分かりにくいです。てっちゃんも最初から「僕、寂しいんです」と言ってくれたらきちんと抱きました。靴を隠す子も、「もうちょっと手を掛けていただけませんか」と言ってくれたらそうします。でも、そんなふうに言える子ばかりではありません。言葉を過信したところから、その子の心が見えなくなってくるのではないかと思います。

8．いたずらっ子コリアと学者肌のシュウちゃんの話

りんごの木にはドイツ人やアメリカ人など、いろいろな子が通っていますが、コリアという、３歳の本当にいたずら坊主がいました。どういう訳か、毎日絵の具をなめるのです。「ノン」って言ってもなめます。質問を変えて「おいしい？」と聞いたら「おいしい」と言うので、私もなめてみたら少し甘いのです。まずかったらなめないだろうと思い、それからは塩を入れてみました。思いがけないいたずらをする子で、すごい勢いで走ってたんこぶをつくったりします。ある時お母さんに「コリアはドイツに帰ってもいたずらっ子なのですか、それともドイツでは、これは普通なのですか」と聞きました。ご両親とも学校の先生なのですが、「普通の子です。人間は集中と解放がセットになっています。集中するから解放が必要、解放するから集中ができる。これはセットなのです。だから、こう見えても、うちのコリアは家に帰ると大変緻密な絵を描きます。ものすごい集中力を発揮するので、りんごの木を選びました」と言われました。

三輪車に乗る前の、またいでガーガー走る車のことを私たちはガーガー車と呼んでいるのですが、コリアは赤くてアンパンマンが付いているガーガー車が大好きでした。完全に私物化していて、いつもそれに乗っています。同じく３歳になったばかりのシュウちゃんという男の子がいます。シュウちゃんは大人の中で育ったので、一見、学者肌で、言葉が割と達者です。シュウちゃんにしてみると、大人と違い、子どもは何をするか分からないので怖くて仕方がないのでしょう。家に帰ると毎日「コリアが怖い」と言うそうです。接触してはいないのですが、結局、一番動きの激しいコリアをずっと目で追ってしまうのではないでしょうか。シュウちゃんはみんなとは離れた所で遊ぶのです。

ある時、砂場で穴を掘って池を作っている近くにガーガー車がありました。すると、シュウちゃんが「コリアのガーガー車に乗りたい」と言ったのです。「そう？　じゃあ、貸してって言ってみたら？」と言うと、途中の所まで行って「貸して」と言いました。コリアは「駄目！」と言うので、「残念だったね」と言ってしばらく遊んでいたら、「やっぱりあれに乗りたい」と言うので「じゃあ、もう１回言ってみたら？」と勧めると、先ほどよりはだいぶ近い所まで行って「貸して」と言ったのです。やはり「駄目！」と言われて、今度は泣きながら「駄目だった」と戻ってきました。

心に寄り添うことは、取ってきてあげることではありません。残念だったのだから、「残念だったね」と言ってあげるのです。私は自分の欲しいものは力ずくでも奪い取るという原点を、シュウちゃんは知らない。よし！　私がみせてあげようと思いました。そこで私は、コリアのガーガー車をとりに行きました。「コリア、これ貸して」「駄目！」「使っていないでしょう。今、池を作っているんでしょう。ここに乗っていないでしょう。使っていないなら貸して」「駄目！」「だーかーら！」と言って私も手に取ったのですが、コリアも手に取って「駄目、駄目」と泣きはじめたのです。泣いている子から奪い取るのは少し嫌です。しかし、乗りかかった船なので、「だから、使っていないでしょう。後で返す」と言ったら、「分かった」と情けない声を出して手を離してくれました。ガーガー車は私のものになったのです。奪い取ったのに使わないのは失礼なので、仕方なく１周回ってシュウちゃんのところに行きました。

「シュウちゃん、これ、貸してあげる」と言ったら、シュウちゃんはとても困った顔をして、ガーガー車の上に座ったかと思うと２秒も経たないうちに立って、

それを持ってコリアのところに行き、「もういい」と置いてきたのです。奪い取るという原点は、この子には通用しませんでした。そうしたら、何とコリアがそのガーガー車を抱えて持ってきたのです。そして、シュウちゃんの前に行って「順番。いいよ」と渡すと、シュウちゃんもコリアもにこっとして、心の結び付きが見えた感じがしました。それから２人は友達になったのです。

子どもはコミュニケーションさえ言葉ではないということです。特に３歳ぐらいまでは心で生きていると思います。そして、実はシュウちゃんは学者肌ではありませんでした。コリアと友達になると、どんどんコリア化していきました。

９．自分の怒りを外にそらすことができた元気者のなっちゃんの話

先日、２歳のひろ君と、なっちゃんという元気な子の間でこんなことがありました。なっちゃんはまだ２回しか来ていないのですが、はっきりした女の子で、対等な子とは取っ組み合いのけんかをしてしまうぐらいの子です。大人にとっていい子に「あの子、すてきね」とあこがれる子はめったにいません。はちゃめちゃだったり、どちらかというと乱暴者だったり、好き勝手なことをしたりする子が魅力的に見えるのです。

２歳になったばかりのひろ君にとって、なっちゃんは魅力的だったようです。りんごの木は、外に古いガスコンロを置いています。要らなくなった本物をままごとに使っているのですが、なっちゃんは片手鍋に泥を入れて料理していました。そこにひろ君がお玉を持っていって、ガスコンロの隣をバンバンたたきはじめたのです。なっちゃんが何度も「うるさい！」と言っても、バンバンたたいています。とうとうなっちゃんは手を出すのですが、手加減されているのです。ひろ君はなっちゃんが働き掛けるから、うれしくて仕方がない。なっちゃんは怒り心頭で、その片手鍋を「全く！」と言って外に投げて行ってしまいました。

私はそれを見て、なっちゃんが大きくなったことに大変感動しました。頭にきている相手と取っ組み合わずに、自分の怒りをそらすことができる。これはすごいと思い、そのことをお母さんに言うと、お母さんは「私にそういう視点はありません。うちのナツミはあんな小さい子にどうしてそんなに腹を立てるのか。小さい子なのだから、バンバンやったからって、そんなに腹を立てなく

てもいいじゃないですか」と言うのです。

それで私は、「あなたも自分の家で料理しているところに子どもが来て、バンバンとやったらどう言う？　『うるさい』って言うでしょう。なっちゃんのように、怒りをそらせないでしょう。あなたでさえできない、怒りを外にそらすという高度なことをなっちゃんはやっている。大きい者が小さい者に腹を立てた時に、そんな方法を取ろうとしている。３歳なのに、すごいと思わない？」と言ったら、お母さんは「ああ、なるほど」と言っていました。

子どもはきちんと心で生きていて、心が動いていると思います。コミュニケーションを取るのも言葉ではありません。大体、子どもは名刺交換などしません。「お名前は」とも聞きません。名前さえ知らなくても心が通じるのです。

10. 心でつながったコッペとリンちゃんの話

高校に入学が決まったコッペとリンちゃんという男の子が、先日あいさつに来ました。コッペは先ほどのコリアのようないたずら坊主で、リンちゃんはシュウちゃんのように校長先生みたいな子でした。その子たちは３歳の時からよく一緒にいたのですが、５歳ぐらいの時に親友だと思うような出来事が幾つもありました。コッペは口が裂けても「ごめん」と言わない子です。リンちゃんはそれを一生懸命諭すのです。「おまえが謝らないと先に進まないんだよ」と１時間にわたって説得したことがあります。

２人は学区が違ったので、違う小学校、中学校に行きました。その間にコッペのお父さんが急に亡くなったのですが、その時に支えたのもリンちゃんでした。どちらかが家出をした時は、どちらかの家に行っていました。２人は高校受験で同じ学校を受けて、同じクラスになり、同じ部活に入ったのです。「あなたたちはいつから友達？」「３歳から」「どうやって友達になったか覚えている？」「覚えている」と言うのです。校長先生のようなリンちゃんがブロックで遊んでいた。いたずら坊主のコッペは、リンちゃんのブロックを取ったのだそうです。「僕がリンちゃんのブロックを取った時に、リンちゃんがニッと笑ったんだ。その時から僕たちは友達なんだ」と、２人とも同じことを言いました。

やはり私たちよりもはるかに豊かな心を持って、子どもたちは結び付いていると思います。子どもの関わりは、何かを壊したとか、突き飛ばしたとか、そういうどちらかというとマイナスの出来事から生まれることが多いのではない

かと思うのです。

子どもの心に添うことで、子どもの心がきちんと動いていることを自覚しただけではありません。例えば泣いている時も、けんかをした時もそうですが、心の中が嵐の時にいろいろ聞いても駄目だということが分かりました。５歳児がすごく怒っている時に、その子の友達が「どうしてほしい」と聞いたら、その子は「放っといて」と言ったのです。確かにそうです。「今はまだ怒っているから駄目だよ」と子どもたちは言いますが、大人はいつも訳が分かりたい、そして解決してあげたい。そのことが、逆に子どもの心に寄り添えないことになってしまっているのです。それから、大人はいつも頭で先を心配して、言葉で言い聞かせて、大人が安心を得ようとしていることが多いのではないかと思います。

11. 子どもは自ら育つ力を持っている

子どもの心に寄り添ってみて、子どもは自ら育つ力を持っていることも確信しました。分かりやすく言うと、誰も教えなくても歩くようになる。誰も教えなくても話せるようになる。それは、子どもはそれぞれ自分の体の中に発達のカリキュラムを持っているからではないかと思っています。

子どもは１歳ぐらいになるとスイッチに凝ります。お母さんはどこにスイッチがあるか、いちいち教えません。やがてティッシュペーパーの時代がやって来て、磁石に吸い寄せられるようにどんどんティッシュを取ります。また、何でも投げる時期があります。しかし、それらを一生は続けていないのです。５歳児はティッシュペーパーにはまっていません。そして、不思議なことに５箱やる子どもはいません。最高でも２箱です。みんな卒業していくのです。２歳ぐらいになると、器から器に水を移すようになります。大きい方の器が空になるまで入れて、あふれているのに止めない。何度も何度もやってびしょびしょになります。それから、１歳の時は隙間に指を突っ込むなど、いろいろなことをします。

子どもは、今、発達していることが、自らの要求によって遊びになっているのです。スイッチで遊ぶのは、指１本が動くようになったことがうれしくて「動くんだよ」と言っています。それにはスイッチが最適です。しかも、スイッチもだんだん重いものを見つけていきます。更に、穴に指を突っ込むようになり

ます。ただ、どこの穴も駄目だと言われるので、最後は自分の穴にたどりつくのですね。やがて、ものが挟めるようになると、ティッシュが最適です。取っても取っても次から次へと出てくるティッシュには「良いおもちゃ」と書いたらいいと思います。また、壁紙が少しめくれていると剥がしたくなります。何でも投げる時期は、投げることを体の筋力が覚えたのです。それから、２歳になるとピョンピョンはねます。宙に浮くのが画期的で、うれしくて仕方がないのです。

子どもはできなかったことができるようになると、そのことがうれしくてたまらないのですが、やがて卒業して次のことにいきます。良いおもちゃがなくても、どんなに貧しい環境でも、自分が人として発達すべきことがぶら下がっていて、それを取り込み、はまって堪能すると卒業する。その繰り返しが、大きくなっていくということではないかと思います。特に０～１歳は身体的な発達が多く、２歳後半から３歳は、割と精神的な発達が多いです。私は「心のひだが増える時」という言い方をしていますが、自我が出てきて自分が客観的に見えるようになってきます。

分かりやすいのは４歳以降です。４歳になると、「○○ちゃんみたいに縄跳びが上手になりたい」「○○ちゃんみたいに補助輪を外したい」と思うようになります。幼児はオリンピック選手には憧れませんし、ノーベル賞を取ろうとも思いません。誰々のようになりたいと思うのです。自分の手の届きそうな魅力がある人がいるということに、集団生活の意味があると思います。例えば「縄跳びってすてき。すごい」と思うと、じっと見ています。そうして観察が終わると、自分の一歩が出る。そして、繰り返しやってみる。７割方できるようになると「見てて」と言うようになります。「見てて」と言う時には大抵失敗します。ところが100％できるようになってしまうと、「見てて」とは言わないのです。既に次のことにはまっているからです。

４歳という線引きをしてしまいましたが、４歳ぐらいになると言葉を使ってコミュニケーションを取ることが多くなります。そして、言葉を使って思考する力が出てきます。５～６歳になると、更に思考回路ができます。脳が発達する時です。そして、身体的な総合能力は、視力、聴力、脳細胞、思考回路も含めてほぼ８割方が６歳で完成すると言われています。ですから、すごい勢いでがんがん上がってくると思います。

12. ルールを守らせることが一番ではない

りんごの木では、４～５歳になると言葉を使って考えるということを始めていて、毎日子どもたちのミーティングをしています。「何を食べてきたの？」という簡単なことから、「昨日こんなことがあったよね」「今日のダイちゃん、何かあったみたいだね」というようにいろいろ話をしていくのですが、その時々に子どもが要求していることは、子どもの発達に必要なことではないかと私は思っています。

先日、ラジオを聴いていたら、今の子どもたちは足の裏の筋肉が発達していないので、足の裏の筋肉を発達させるための靴を開発すると言っていました。でも、これは逆です。子どもたちの足の裏が発達するのは、多分３歳ぐらいからだと思います。その頃の子どもは滑り台を下から上っていきますが、その時に足の裏の筋肉が発達しているのです。１歳や２歳は上から滑るだけで満足していますが、３歳になると下から上がっていきます。４歳ぐらいになると、上まで行けるかどうか競い合うようになり、更に５歳ぐらいになると、どうしたら滑りがいいかを考えて、砂をまいたり、ジャージに着替えてみたりするようになります。子どもたちは、同じものでも年齢に合った遊び方をきちんとしているのです。滑り台は下から上がってはいけないというルールが先にあることで、子どもが未発達になっていることはよくあると思います。滑り台を下から上がってはいけなかったら、崖に登ろうとします。足の裏が発達したいと言ってうずうずしているのに、そういうことを許さずに靴でその力を出すというのは変ではないでしょうか。

横浜市の公園には「公園での正しい遊び方」という看板が立っています。そこには絵も文字もたくさん書いてあるのですが、例えば「滑り台は反対から登ってはいけません」「滑り台に登る時はパーカーを着てはいけません」、それから「ふざけてはいけません」など、いろいろなことが書いてあるのです。子どもは公園に入る時、そんなものを読んでから遊びません。更に、鉄棒には「２歳から６歳まで」というシールが貼ってあるのです。滑り台にもありました。これは何でしょうか。

遊具は子どもが自ら発達するために便利な遊び道具であって、ルールを教えるためのものではないはずです。それを大人の都合で看板を設置しているのです。何かがあった時に、行政はきちんと対応していたと言うためです。それを

また律儀に守る親がいるのです。りんごの木でも保育者と大げんかした人がいます。その人の子どもは１歳なので、嫌でも下から上がれません。他の子どもたちが下から上がったら、そのお母さんは怒ってしまったのです。でも、他の子は下から上がって１歳の子を突き飛ばしたわけではありません。途中で出くわしてしまったら「チビだな、しょうがないな」と思って下りてきます。そのように困った事態が起こることによって、解決していく能力ができるのです。

それなのに、ルールを守ることが一番になり過ぎている気がします。公園などでも「それは駄目ですよ」と、こまめに注意するお母さんが「いいお母さん」と評価され、それを放っておくと「あのお母さんは、子育てを手抜きしているわよね」と言われたりします。本当はもっと子どもを信じていいのです。私が子どもの心に寄り添って思ったことは、子どもの心は動いている、きちんと頭は考えている、体は要求していることをきちんとマスターしていこうとしているということです。今、私は子どもをすっかり信じています。子どもはきちんと、今をありったけ生きていると思います。

そこでトラブルや問題など困ったことが起きた時にどうするかは、私たちの役目だと思います。子ども同士の通訳をしたり、工夫したりします。滑り台が駄目ならば、どこかの崖に連れていく。保育室の中で水遊びをして、びしょびしょになって困ると思ったら、「悪いけれど、外でやってくれる？」と言います。子どもはできればいいので、大抵は「いいよ」と言ってくれます。

13. 体験させているつもり

もう社会人ですが、シノブ君という子がいます。３歳、４歳、５歳の時は毎日泥をいじる子で、年長児の時には本当に見事な泥団子を作るようになりました。形が美しく、つやがあり、落としても割れないという３要素があるシノブ君の泥団子は、とてもすてきでした。私はそれまで泥団子が作れなくて、シノブ君もそろそろ卒業してしまうので彼がいるうちに教わろうと思いました。「シノブ君、泥団子上手だよね。教えてくれない？」と言ったら、シノブ君は「教えられねえよ」と言ってきました。職人は見て盗めと言いますが、私はその時「この子は３年かかって極めたのだから、一気に教えてもらうなんてすごく失礼だったな」と思いました。次の日も隣に行ってシノブ君を見ながら作っていたら、シノブ君は地面に線を引いて「ここから入るなよ」と言うのです。仕方

がないので他のところから見ていました。

その頃はみんなが泥団子に夢中でした。私が一生懸命作っていると、フっ君という子が「もうそれは駄目だから捨てて、やり直しな」と言うのです。「え、だって、ここまできて、こんなにきれいだよ」と言ったら、「泥団子は真ん中が硬くなかったら、どんなに上に乗せていっても駄目なんだよ。堅いのはできないの。だから、それは駄目だから最初からやり直した方がいいよ」と言われました。形ができてくると、つばを付けて磨くのです。そのうちにフリースがいいと言い出して、仕方がないのでフリースをハサミで切ってあげてしまいました。そうしているうちに、私も上手なものができたのです。落としていないので硬いかどうかは分かりません。でも、見ただけでもうれしくて、みんなどこかに隠してくるのですが、私はもったいないのでビニール袋に入れて、自慢して持ち歩いていました。

その直後に、京都教育大学で子どもの遊びの研究をしていらっしゃる加用先生という方が、ある保育園に出入りしていたのですが、その保育園でもやはり泥団子がはやっていました。加用さんは泥団子に魅せられて、大人としてはまったのだと思うのですが、電子顕微鏡が出てきてしまいました。そして、オリーブオイルを２滴落とすとか、どのきれで磨くといいというようにして極めてしまったのです。そして、泥団子の作り方という冊子が作られ、更にビデオも出されました。加用さんの泥団子をご覧になったことがありますか。大きくて、大理石のようにピッカピカなのです。

新聞に載せたりビデオを出したりして泥団子が世の中でブームになると、イトーヨーカドーが泥団子キットを出したのです。テーブルに敷くクロスと中心に使う泥、上にかける白砂、そして磨くきれがセットになっていて、それが大変売れました。更にテレビ番組でも取り上げられました。それを使うと、最小限の汚れでシノブ君と同じ泥団子ができてしまうのです。

そのキットで作った泥団子とシノブ君の泥団子は違います。シノブ君はいつも二つのバケツを持って歩いて、隣の桃畑から白砂を取ってきていました。自分で試行錯誤して、３年かかって極めたのです。そして、完成した時にはものすごい達成感と充実感があったでしょう。それを誰かが取ったり、壊れたりしたら、大泣きして怒ったと思います。キットの場合、言われたとおりに作りました、そして、できました。でも、ここには試行錯誤や充実感、達成感、成功

感はないと思います。壊れても大して心に響かない。このようなものを私は「体験もどき」と言います。本当の意味での体験をさせずに、うわべだけの体験をさせて、体験したつもりにさせていることが多過ぎないでしょうか。大人の不都合がない程度に体験して、形上は整えていくことが多くなっているような気がします。

昨年か一昨年、加用さんと対談するという話が来ました。会ってみると、とてもいい方で、やはり自分の中に遊び心を持っている方でした。

子どもはある人に興味を持ったら、「一緒に遊ぼう」とは言いません。大抵、少し押してみたり、ひっかいてみたり、髪の毛を引っ張ってみたり、その人のものをわざわざ取ってみたりします。「入れて」「どうぞ」「遊ぼ」「いいよ」「ごめんね」「いいよ」「ありがとう」「どういたしまして」などの人間関係をスムーズにするための言葉を、子どもは記号として学んでいるような気がするのです。子どもはみんな自分ありきで、わがままです。わがままぶりを発揮して、そこに衝突が起きてはじめて本物に育っていくと思います。「あ、泣いちゃった」「大好きなのに怒っちゃった」ということを通じて、泣かれて分かる、怒られて分かる。心がそれを感じる前に、大人が体裁を整えてしまっているように思います。

14. 今あるままをまず受け止める

先ほど、りんごの木の４～５歳児は毎日ミーティングをしているという話をしましたが、それは道徳指導をするためのものではありません。

５歳のコウヘイ君は、木曜日になると暗い顔をして来ます。休みたくなってしまうのです。なぜかというと、木曜日は給食だからです。みんな集まった時に「コウヘイが木曜日になると暗くなるのを知ってる？ どうしてああなっちゃうんだろうね」と聞くと、みんなが「野菜が食べられないからだよ。給食に必ず野菜が出るから、コウヘイはああなっちゃうんだよ」と教えてくれました。５歳児は分かりますが、４歳児は野菜や乗り物など同じものを群れにして判断することができないので、野菜といえばニンジン、キャベツ、トマトと、全ての野菜を絵に描きました。コウヘイ君に「この中で何が食べられるの？」と聞くと、「おイモだけ」と言うのです。おイモだけはつらいと思います。そこで「コウヘイはおイモしか食べられません。キャベツもニンジンもトマトもネギも全

部駄目なのだって。だから、りんごの木を休みたくなってしまうのだろうね。でも、せっかくりんごの木が好きなのだから、休まないで済む方法はないかな。コウヘイが木曜日に暗くなっちゃうのをどうしたらいいと思う？」と子どもに振るのです。

子どもたちは「コウヘイは海苔が好きだろ。全部海苔で巻いちゃえば？ そうすれば全部の野菜が海苔味になるよ」「大好きなおもちゃを前に置くんだよ。それだけを見れば食べられる」と言ってくれました。それから、「ここに人形を置くといい。人形を置いて『あーん』って言って自分の口に入れる。人形に食べさせるふりをして自分の口に入れると食べられるかもしれない」と言う子もいました。恐らく赤ちゃんか何かにやっているのを見たのでしょう。それから「周りの人に食べてもらっちゃえばいいんじゃないの？」と言う子や、「残せばいいじゃん」と言う子もいました。そして最後には「紙に包んで捨てちゃいな」という子も出てきました。5歳にして、紙に包んで捨ててしまうという本音を持っているということです。

「いっぱい出たね。コウヘイはどれにする？」と言うと、コウヘイ君は「僕、残す」と言ったのです。りんごの木では、食べ終わったものを作ってくれた人のところに「ごちそうさまでした」と持っていかなければいけません。「コウヘイさ、これを残そうと思って行くけど、ここからUターンしちゃうんじゃない？」「そうなんだよ。大人は『一口は食べてみてね。一生懸命作ったのよ。体にもいいのよ』と言うに決まっている」「そうか、そう言うに決まっているか。じゃあ、どうするのよ」と暗礁に乗り上げてしまいました。

そこで、実際に作っている人に聞いてみることにしました。前田さんという方にこの話をすると、「私、見ていると、絶対に駄目だという子と、一口でも頑張れるという子は分かる。だから、一口でも頑張れる人には『一口でも食べてみてね』と言うし、この子はもう全然駄目だという時は『今に食べられるようになるといいね』と言って受け止めてあげる」と言ってくれました。これで一件落着です。コウヘイ君は「残します」と持っていくようになりました。

その後、幾つかの出来事がありました。ある日、スパゲティとポテトサラダが出ました。サツマイモではないので、ポテトサラダは食べられません。ところが、コウヘイ君が私の後ろに来て「ポテトサラダ、食べた」と言うのです。「すごいじゃん、ポテトサラダ食べたんだ」と言うと、みんなも「今日ね、コ

ウヘイがポテトサラダを食べたよ」と言って乗ってきます。そうしたらコウヘイ君が「キュウリも入っていた」。ポテトサラダを食べただけでも、鼻が天狗です。

子どもは子どもなりに、大人が言わなくても何でも食べられる方がいいと思っているのです。それから、全部残さずに食べられたら格好いいとも思っています。しかし、それができない時があります。好き嫌いのない子、残さず食べる子、はきはきしている子、あいさつができる子というように、私たちが望む「あるべき子ども像」を掲げて保育をしようと思っても、実は駄目な子ばかりなのです。あいさつができない、好き嫌いをするなど、子どものマイナス部分ばかりをクローズアップして保育をしていると、子どもも保育者もつらいと思います。欠点を持ち上げようとする保育は、保育者も子どももつらいものです。取りあえず､あるがままを引き受けませんか。野菜が嫌いなコウヘイ君も、元気なのだからいいではないですか。そして、コウヘイ君のようにポテトサラダを食べただけで鼻が天狗になった子は、絶対に何かにチャレンジします。次にトマトにチャレンジするのは目に見えています。自分がちょっとしたことで「やった！」と思うから、次があるのです。

いろいろな子がいます。そのいろいろな子のありのままを、その子のスタートとしていきませんか。今あるままを、まず受け止めるということです。自分の気持ちを受け止められてこそ、人の気持ちを受け止められる子になっていくと思います。大人も、自分の気持ちが受け止められてこそ、人の気持ちが分かるのではないでしょうか。自分の気持ちを否定されて、人の気持ちは尊重できません。それは自分の本音をなくすこと以外にないのです。

15. 寄り添うことで、一歩前へ進める子どもたち

今、小学校の先生たちが、子どもたちの本音が見えないと言います。本音がないのかもしれません。それから、妙に素直である、指示に従う、集中力がない、２人までは遊べるけれども３人からは遊べないといったことを口々に言います。更に日本の子どもの自己肯定感が低いことは､周知の事実だと思います。

2007年のユニセフの調査で、日本の小学生で「自分は孤独である」と答えたのは37％、世界断トツ１位でした。それから違うデータですが､「あなたは何のために勉強するのですか」という問いに対して、日本の子どもで一番多かっ

たのが「いい学校に入るため」、そして２番目が「お父さん、お母さんが喜ぶため」でした。子どもは自分をさておいて周囲に気遣いをしながら生きています。そして、自分はすごく孤独であるという図式だと思うのです。

本音が良いか悪いではなく、あるがままの気持ちを受け止めることで、その子は前を向いて歩いていけるのです。更に、何かがあった時に寄り添ってくれる人がいることで、本来の自分を取り戻せるということに私は気付きました。例えば子ども同士がけんかをしています。一方がたたいて、もう一方が泣いています。それを解説する大人が多いのです。「見ていたけれど、あんたがあの子のおもちゃを取ったから泣いているの」と解説されても、「それは僕が悪かった」とは言えません。解説されたくて、自分を裁いてほしくて来る子などいません。嫌なことがあったから保護されたくて避難してきたのです。それなら保護すればいいではないですか。大抵の子は２時間も座っていません。２分も座ったらおしりがムズムズして、また先ほどのところに出ていきます。何かがあった時に寄り添ってくれる人がいることで、本来の自分を取り戻し、そして自分から一歩出ていくことができるのです。これは親もみんなそうです。

小学生もそうです。りんごの木では不登校の子どもを何人も引き受けてきましたが、不登校の子どもたちにも「お疲れさん。あんたの居場所がここにあるよ」と用意すると、90％の子はきちんと出ていきます。何かがあった時に寄り添ってくれる場所、もしくは人がいることで本来の自分を取り戻せる。そうすると、前に向いて歩いていく力が出てくると思います。

皆さんの職場でもそうではないでしょうか。私は若い時、園長はなぜ掃除が好きなのだろうと思っていましたが、自分がそういう立場になってみると本当に汚いところが気になるのです。園長が気になることと、担任が気になることは少し違います。そうすると、いろいろたまってきます。その時のために、職場に愚痴を言える人を１人つくっておくことです。「うちの園長は私にこんなことばっかり言うの」と言いたい放題言って、「そうそう、最悪だよね。私も言われたことがある」と相手がうなずいてくれると、どういう訳か気持ちが軽くなってきて、最後には「でも、悪い人じゃないわよ」「よそよりはいいかも」と言ったりするのです。その人が「私から言ってあげようか」と言ったら困るでしょう。そうではなくて、「うん、うん」と聞いてもらっただけなのです。子どもも、大人も、お年寄りもみんな、自分の声に耳を貸してくれる人、自分

の心を受け止めてくれる人がいることで、本来のその人が取り戻せていくのです。

心に添うということは、子どもの言いたい放題にすることでもないし、自分をなくして子どもに寄り添うことでもありません。もちろん私も「それはやめてね」と言うこともあります。「それは迷惑だから」「それは私は嫌い」と言うこともあります。私は、人と差別する行為や人を侮辱する行為が許せないのです。それから、１対１のけんかはいいですが、２対１になったところから、それはいじめだと思って烈火のごとく怒ってしまいます。そこには意味があるのだろうと悠長に思っている場合ではないことは山ほどあります。その時は、私たちも生身の人間ですから「それは寄り添えない」と言うのはありだと思います。それから、先ほども言ったように、子どものつもりで１日は動いていきません。子どものつもりを分かりながら、私たちのつもりも進めていく必要があります。しかし、心に寄り添うことが基本姿勢であると私は思っています。

16. 人を許すこと、もとの気持ちを伝えること

大人は先を心配して、頭と口で育てようとしています。心も体も擦り傷なくして、人との関わりなくして育つことはないと思います。一生をかけて練り上げていくのが人生ではないでしょうか。私たちが預かっている間に、品が良くて、ひんしゅくを買わない、体裁のいい、いい子に育てる必要はありません。人生は長いのですから、今がいい子でなくてもいいのではないでしょうか。私は実際に子どもの心に目を向けるようになってから、心のドラマがよく見えるようになってきた気がします。そして、実際にあったドラマを絵本というかたちにしています。その中の一冊に『ぜっこう』という本があります。年長児が１か月にわたって絶交してしまったという話です。

シュンタロウという子が、だんだん元気がなくなっていきます。子どもはそういうことを担任や親には言いません。用務員さんなど、人畜無害な人に言うのです。うちの場合は出版部があって、60代のおじいちゃんのような人がいるのですが、その人が「５歳の言う絶交ってどのくらいの意味があるの。シュンタロウが、俺は絶交されていると言ってきた」と言うのです。見ていると、ガクちゃんという子が絶交している側なのですが、ガクちゃんもつらそうでした。絶交すると自分で決めたことに縛られてしまいながらも、うっかり遊んでしま

うのです。

２人ともつらそうだったので、私は見ていられなくなってシュンタロウに「あんた絶交されてるの？」と聞きました。周りの子が「絶交って何？」と言うと、ガクちゃんが「一生遊ばないってことだよ。友達じゃないってことなんだ」と言いました。「シュンタロウ、何で絶交されちゃったの？」と聞くと、シュンタロウは「それが分かんないんだ」と言うのです。「分かんなくて絶交されているのは気の毒でしょう。原因ぐらい言ってあげたら」とガクちゃんに言うと「おまえさ、ずっと前にかくれんぼしていて鬼だった時、ちっとも見つけに来ないからどうしたのかと思って出ていったら、おまえは弁当を食ってたんだ」。恐らくかくれんぼの途中でお弁当の時間になってしまったのでしょう。ガクちゃんはそれが許せなかったのです。シュンタロウが「もうしません、許してください」と言ったら、他の子が「大体、シュンタロウって自分の都合でルールを変えるよな」と言って、シュンタロウはずるいということになってしまったのです。

私は、シュンタロウがすごくつらそうで、これ以上シュンタロウの元気がなくなっていくところを見ていられないと思って、「人が人を許せないって、よほどのことだと思うよ」と言うと、ガクちゃんは「じゃあ、愛子は泥棒を許せるのか」と聞いてきました。年長児には理屈っぽい子がいますが、ガクちゃんもそれなのです。少し考えて「泥棒は許せる気がする。仕事がなかったり、リストラに遭ったり、家族が家にいて食べるものがなかったり、小さい時からあまりいい育ちをしていなくて泥棒をするとすっきりする性格になっちゃったり、その人のせいじゃなくて、泥棒をしなくちゃいけないようなことになってしまったんじゃないかな。それはいけないことだから警察には言うけど、その人は許せるかな」と私は言いました。するとガクちゃんは「じゃあ、人殺しも許せるのかよ」と言ってきました。私は「人が人の命を奪うことだけは、どんな理由があっても許せない」と言いましたが、もうそれ以上、言うことがなかったのです。私はそれまで、泥棒は許せて人殺しは許せないということを自分で考えたことはありませんでした。このように、保育は子どもに突き付けられて考えるので、こちらが育つのです。

私は「人が人の命を奪うことだけは許せない」と言うと、ガクちゃんは黙ってしまいました。これ以上に言うことは何もなかったので「じゃあ、弁当にし

ようか」と言ったら、ガクちゃんが目にいっぱい涙をためて「絶交を解く」と言ったのです。やはり絶交している方もつらかったので、隣同士でお弁当を食べていました。ガクちゃんが「お弁当を食べたらさ、ハンモックに乗ろうぜ」と言うと、シュンタロウが「俺一番！」と言いました。するとガクちゃんは「それがいけないんだよ」と言ってくれました。私も「ガクちゃん、今のはすごく分かりやすい」と話しました。卒業するまで、ガクちゃんは何かあると「絶交するぞ」を脅し文句に使っていました。シュンちゃんは「えへへへ」と笑っていました。

『ありがとうの気持ち』では、あーちゃんという子が引っ越しするということで、1人1枚カードをプレゼントしてくれました。お母さんに字を教わって、「まあるい心のショウちゃん」「優しいね、愛子さん」といったことを書いたカードを作ってくれたのです。アキという男の子は、あーちゃんのことが大好きでした。あーちゃんが元気な声でアキのカードを読み上げると、「暴れん坊アキ」と書いてありました。アキは「要らない」と拒否すると、あーちゃんは大声で泣きました。私はアキに「何て書いてほしかったの？」と聞くと、「アキ、大好き」と書いてほしかったと言うのです。私はあーちゃんのところに行って、「あのね、アキは大好きって書いてほしかったんだって。書いてあげれば」と言いそうになった私に、あーちゃんは「だって、これは私が考えたことなんだから」と言ってきました。

その時、私ははっとしました。私たちはプレゼントを用意する時に、その人に思いを寄せて、時間と心を使ってプレゼントを用意します。でも、いつの間にか、失敗のないプレゼントを贈るようになってしまいました。結婚のお祝いは「何が欲しい？　幾らぐらいで」、クリスマスプレゼントは「何がいい？」というように、注文に応じたプレゼントは失敗がありません。本来、あーちゃんのように、その人に思いをはせて贈るのがプレゼントですが、このように相手に受け取ってもらえないことが起き得るのです。本当のプレゼントには受けとってもらえないという心配があるのです。あーちゃんは引っ越しの前日に書き直してきました。それには「アキ、元気いっぱい」と書いてあり、アキはこれを受け取ったという話です。

このように、子どもから人間本来の気持ちを教わることがあります。人間には本来の気持ちがある。しかし、年を取るとともに「これはお母さんに怒られ

る」「これはお父さんに怒られる」「これは先生が嫌がるだろう」「これは法律で禁じられている」など、自分の気持ちにいろいろなものが張り付いて、どんどん自分の気持ちが見えなくなってしまうのです。乳幼児はそういうものが張り付いていないので、もとを見せてくれています。そう考えると、私たちはいつも本来の気持ちに気付かされるという、本当にいい仕事をさせてもらっていると思います。

17. 私が出した絵本から

最新作の『わたしのくつ』という絵本は、かおるちゃんが買ってもらった靴が自分の靴になっていく過程を書いたものです。新しい靴を買ってもらったかおるちゃんは、「汚れないかな」と言って幼稚園に着いてからも抱きしめて、その日は外で遊びませんでした。その時に担任の先生が「かおるちゃん、それはお母さんが『元気に遊んでね』って買ってくれたんじゃない？　だから、汚れてもいいと思うよ」と言ったのですが、私は「余計なことを言わないで。この子が『大事』と思う気持ちは、何日も続くものじゃない。『これは私の大事なもの』と思う気持ちを、今日１日外で遊ばなくても保証してあげた方がいい」と言いました。かおるちゃんは何日か外に出ませんでしたが、最後には自分の靴になって外で遊べるようになっていきます。

あえて今これを出したいと思ったのは、スピードが速すぎるからです。子どもの、一つのものを大事にしたり、そこにとどまったりということが全て無視されて、物や人との出会いが「さっさと」になっている。もっと、じっくり、ゆっくりでいいのではないかと思ったのです。昨年10月には２刷になって、韓国版も出ています。

最後に、私が最初に出した絵本を読んで終わりにしたいと思います。絵本にしないかと編集者が３年ぐらい言い続けてくれて、本当に手取り足取り教えてくれて、最初に出した作品が日本絵本大賞を頂き、課題図書になりました。更に教科書にも出て、ちょうど10年がたちます。

『けんかのきもち』　柴田愛子　文／伊藤秀男　絵

これは子どもたちの遊び場、「あそび島」のお話です。あそび島には先生もいて、毎日たくさんの子どもが遊んでいます。僕は、たい。うちの隣のあそび

島で毎日遊んでいる。一番の友達は、こうた。なのに、こうたとすっごいけんかした。蹴り入れた。パンチした。つかんだ。飛びかかった。でも、こうたは強い。びくともしない。僕よりすごい蹴り入れられた。パンチされた。つかまれた。倒された。もう嫌だ。僕が言うと、「終わりにする」、そう言ってこうたが僕の肩をどついた。僕はしりもちをついた。うーうー泣いた。悔しかった。泣きながら走ってうちに帰った。お母さんにくっついてもっと泣いた。泣いても泣いても、泣きたい気持ちがなくならない。

愛子先生がいきなり玄関を開けた。「たい、おやつ一緒に食べよう。さっきみんなで作ったぎょうざだよ」。返事なんかしてやんない。「お母さんも一緒にどうぞ」。行くもんか。絶対行ってやんない。お母さんだって行かないに決まってる。

絶対行かないと思ったのに、お母さん、１人で行っちゃった。何でだよ。何でだよ。何でなんだよ。「お母さん帰ってきて！」。玄関を開けて叫んだら、みんなが見えた。「たい、おいでよ。一緒に食べよう。おいしいよ」。嫌だ、行くもんか。その時、「ごめんな」、こうたのでっかい声がした。何でだよ。何でだよ。何でだよ。何で謝るんだよ。涙が出た。急いで玄関の戸を閉めた。そんなこと言うな。けんかの気持ちは終わっていない。うー。お母さんがぎょうざを持って帰ってきた。20個あった。こうたが作ったぎょうざだ。１人で食べた。ばくばく食べた。もう涙が止まった。

けんかの気持ちが終わった。「お母さん、お皿洗って」。あそび島の庭に入る階段を上りながら、どきどきした。お皿を持っている手に力が入って、がちがちになった。向かいの窓にこうたが見えた。「ごめんな、さっきはごめんな」、こうたが言った。えへへ。僕はちょっと照れた。でも、今度はきっと僕が勝つ。

少し補足させていただくと、りんごの木では料理保育をしていて、小麦粉シリーズで１年の最後がぎょうざの皮だったのです。ぎょうざの皮を１人20個は作りたいと思っていたのですが、子どもたちはもう疲れてしまって、おしゃべりもしませんでした。「中身はみじん切りで大変だから、私がやっとくよ」と言うと、子どもたちはみんな「自分たちでやるからいい」と言って、皮を包んだ時には午後１時を回っていました。朝からずっと集中していたので、ここではじけたかったのです。本では原因に触れていませんが、ささやかな原因はあ

りました。解放と集中です。

こうたとたいは仲良しです。そして、体力が互角なので、けんかができる間柄なのです。ですから、少し触っただけで、こうなったのだと思います。これを見ていて思ったのは、たまたまたいの家が隣です。だから帰ってしまったのですが、こうたばかり「ごめんね、ごめんね」と言っていて、たいは一言も言わずに「えへへ」で終わりです。何かあった時、強者から弱者に歩み寄るということを子どもたちは知っているのだと思いました。たいは泣いてしまったのですから、やはりこうたは勝っていたのです。

子どもたちに勝ち負けはどうやって決まるのかと聞いたら、「泣いたら負けだよ」と言われました。「けんかした時って、最後はどうするの」と聞くと、「え？

大人って、ごめんねってそれぞれに言わせて握手させるの好きだよな」と言うのです。子どもは「へへへ」「遊ぼうぜ」「行くぜ」で終わるそうです。けんかできる間柄ということは、修復もできる間柄なのです。

18. 子どもにとって頼りになる大人はあなたしかいない

子どもからいろいろなことを学びながら、保育を始めて40年が経ってしまいました。ありがたいことに、私の人生において経済的にも内面的にも糧になっているので、いい仕事に就いたと思っています。皆さんも子どもたちの中で楽しんで、そして、自分の肥やしにしていただけたらと思います。

担任は子どもを選んでいません。子どもも担任を選んでいません。そして、子どもは複数いますが、お母さんの代わりになる担任はあなたしかいません。子どもたちが安心して来られる、ほっとできるということが何より一番だと思います。私は保育者になろうとした時、未熟で何もありませんでした。しかし、自分に誓ったのは、今から出会う全ての子どもを好きになってみせるということでした。この子は分かりにくいと諦めてはいけません。子どもにとって頼りになる大人はあなたしかいないということを自覚して、保育に当たっていただけたらうれしく思います。